

特110

726

A STORY OF DENMARK  
 OR  
 A STORY OF HOW FAITH  
 AND FORESTRY SAVED A COUNTRY  
 BY  
 KANZO UCHIMURA

内村鑑三述

デンマルク國の話

信仰と樹木とを以て  
國を救ひし話

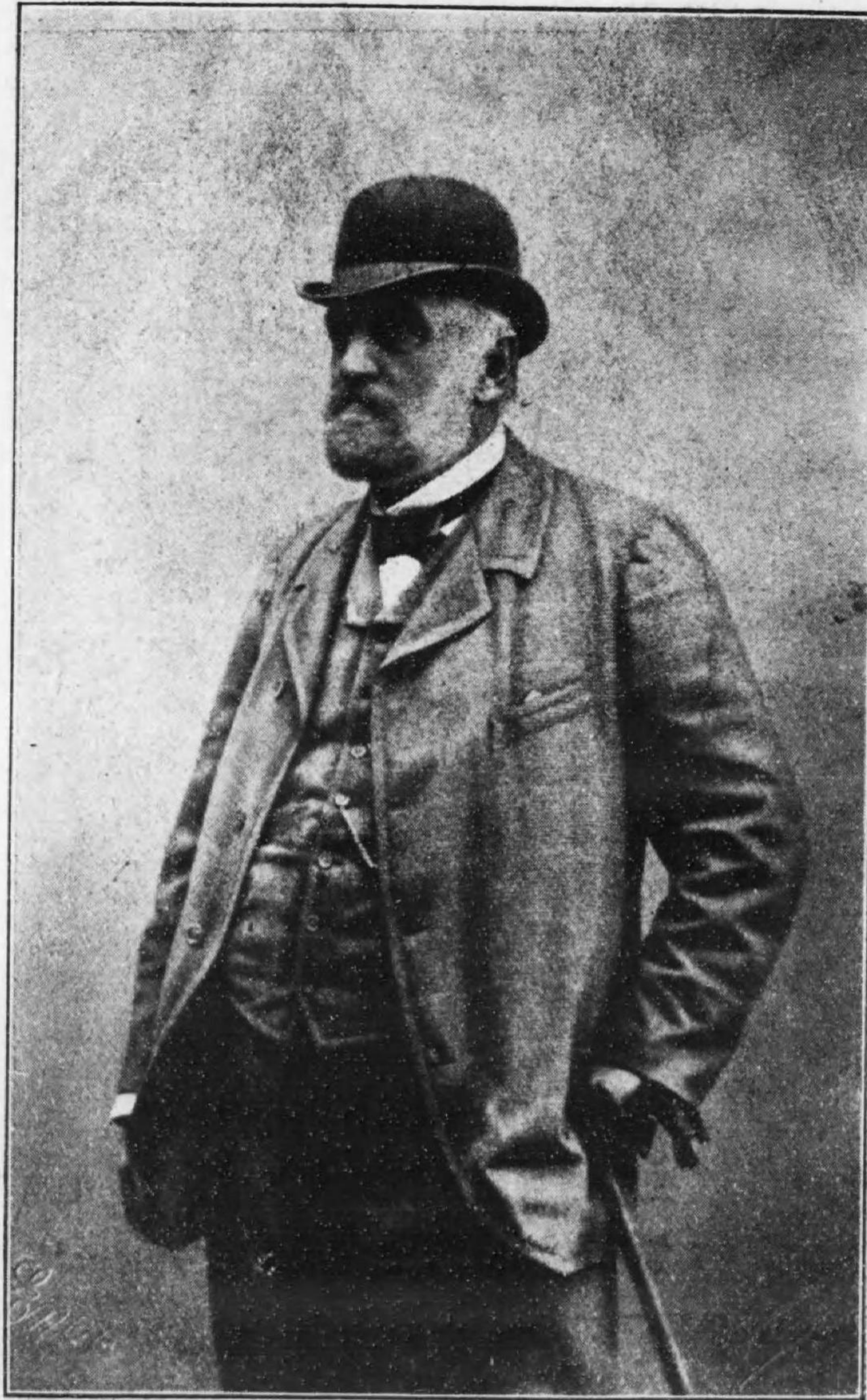
東京柏木 聖書研究社

~~270~~  
~~714~~



始





救を國て以を木樹ずらあにて以を劍  
スガルダ官士兵工國クルマンデしひ

書著三鑑村内

- |                          |                             |                          |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |          |       |       |
|--------------------------|-----------------------------|--------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----------|-------|-------|
| 版四                       | 版九                          | 版十                       | 版四    | 版九    | 版三    | 版七    | 版四    | 版三    | 版再    | 於近    | けるに   | 代     | 科學的思想の變遷 | 定價二十錢 | 郵稅二錢  |
| 路愛                       | 基督                          | 後世への最大遺物                 | 得     | 記吟    | 錄談    | 論談    | 安座    | 教人史   | 國史    | 國史    | 國史    | 國史    | 國史       | 國史    | 國史    |
| 路愛                       | 基督                          | 後世への最大遺物                 | 得     | 記吟    | 錄談    | 論談    | 安座    | 教人史   | 國史    | 國史    | 國史    | 國史    | 國史       | 國史    | 國史    |
| 定價十五錢                    | 定價十五錢                       | 定價十五錢                    | 定價十五錢 | 定價十五錢 | 定價十五錢 | 定價十五錢 | 定價十五錢 | 定價十五錢 | 定價十五錢 | 定價十五錢 | 定價十五錢 | 定價十五錢 | 定價十五錢    | 定價十五錢 | 定價十五錢 |
| 郵稅二錢                     | 郵稅二錢                        | 郵稅二錢                     | 郵稅二錢  | 郵稅二錢  | 郵稅二錢  | 郵稅二錢  | 郵稅二錢  | 郵稅二錢  | 郵稅二錢  | 郵稅二錢  | 郵稅二錢  | 郵稅二錢  | 郵稅二錢     | 郵稅二錢  | 郵稅二錢  |
| How I Became A Christian | Representative Men of Japan | Wie ich ein Christ Wurde |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |          |       |       |
| 定價五十錢                    | 定價五十錢                       | 定價七十五錢                   |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |          |       |       |
| 郵稅四錢                     | 郵稅四錢                        | 郵稅不要                     |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |          |       |       |

東京府下淀橋町柏木九一九

受次、發兌 聖書研究社



救を國て以を木樹ザらあにて以を劍  
スガルダ官士兵工國クルマンデレヒ

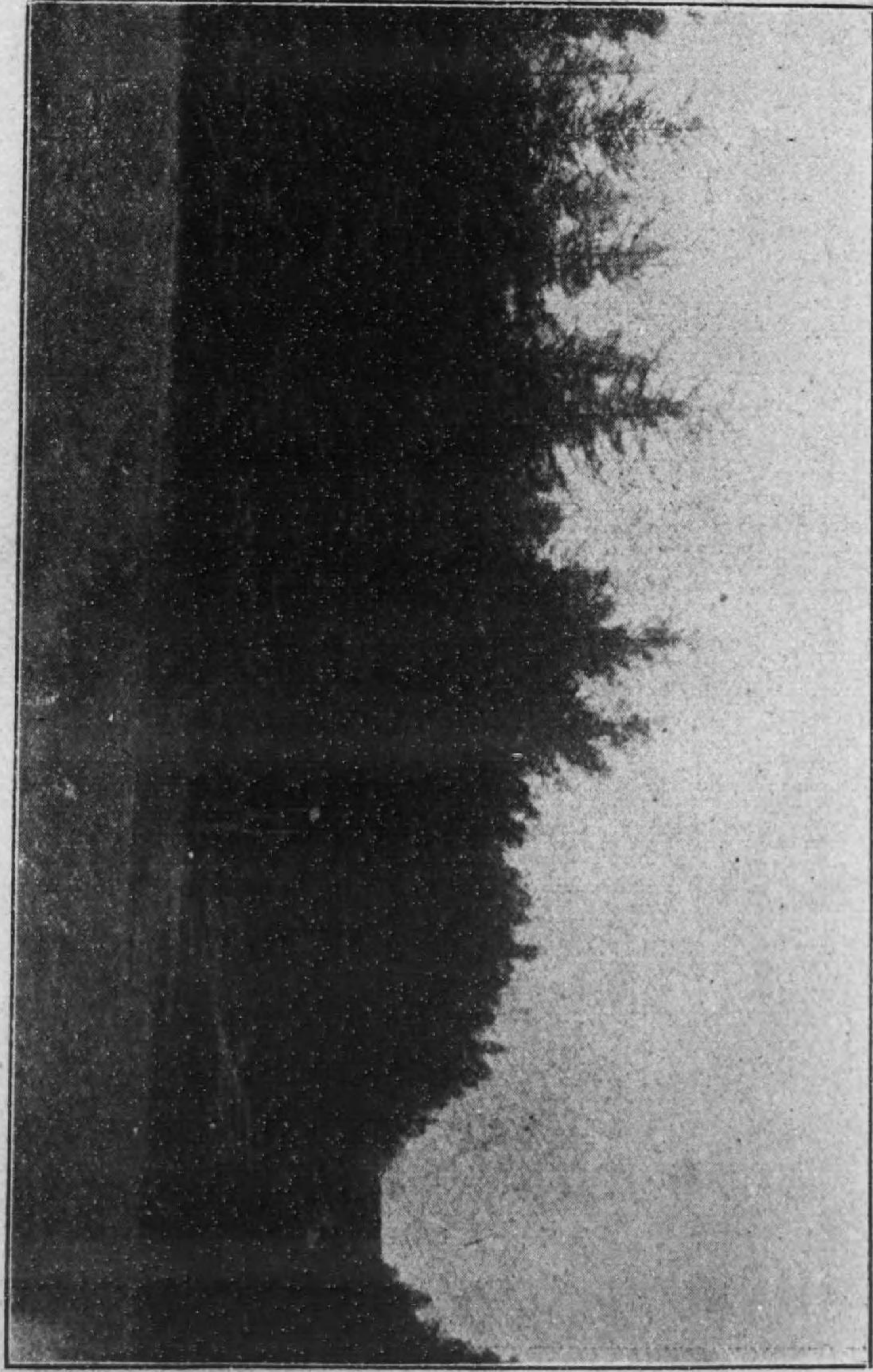
書著三鑑村内

- |                            |                             |                |
|----------------------------|-----------------------------|----------------|
| 近<br>於<br>け<br>る<br>代<br>に | 科學的思想の變遷                    | 定價二十錢<br>郵稅一錢  |
| 版<br>三                     | 歡喜と希望                       | 定價十五錢<br>郵稅一錢  |
| 版<br>四                     | 基督教問答                       | 定價三十錢<br>郵稅一錢  |
| 版<br>七                     | 國史                          | 定價五十錢<br>郵稅六錢  |
| 版<br>三                     | 安座                          | 定價四十錢<br>郵稅四錢  |
| 版<br>九                     | 後世への最大遺物                    | 定價十五錢<br>郵稅二錢  |
| 版<br>四                     | 基督信徒の慰諭                     | 定價三十錢<br>郵稅四錢  |
| 版<br>十                     | 得                           | 定價十五錢<br>郵稅二錢  |
| 版<br>九                     | 路愛                          | 定價十五錢<br>郵稅二錢  |
| 版<br>四                     | How I Became A Christian    | 定價五十錢<br>郵稅四錢  |
| 版<br>九                     | Representative Men of Japan | 定價五十錢<br>郵稅四錢  |
| 版<br>四                     | Wie ich ein Christ Wurde    | 定價七十五錢<br>郵稅不取 |

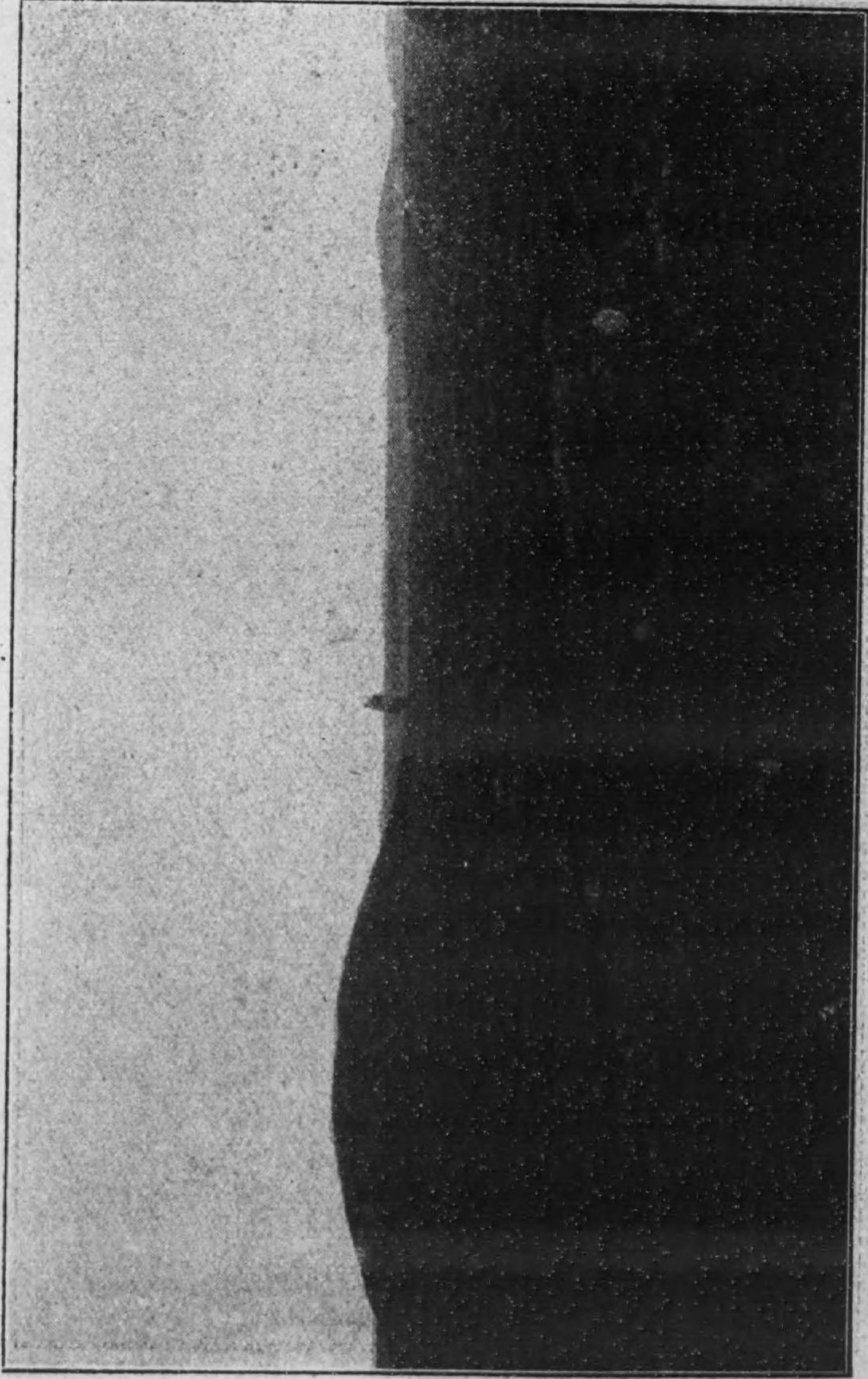
東京府下淀橋町柏木九一九

受次、發兌 聖書研究社

る成と林縁てし化漠荒



地荒のドムラトットユの前以手着林殖



物110  
726

(1) 話の國クルマニア

デンマルク國の話

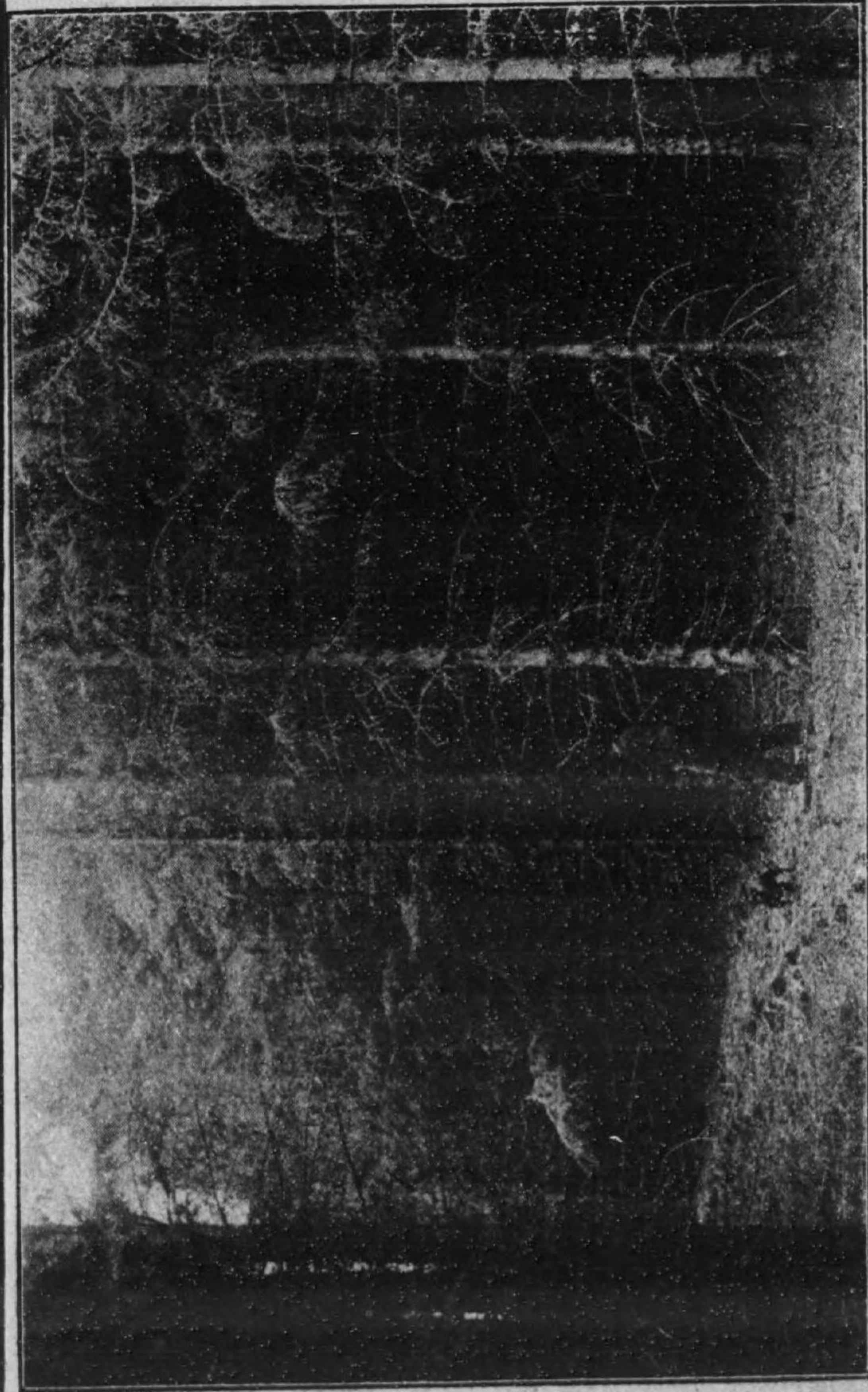
信仰と精木とを以て國を救ひし話

明治四十四年(一九一一年)十月廿二日  
東京柏木全井館に於て述ぶ

内村鑑三

2. 2. 25

曠野と濕潤なき地とは樂しみ、  
砂漠は歎びて番紅の如くに咲かん、  
盛に咲き歡ばん。



殖林成功してて大樞の密林を見る

特110  
726

(1) 話の國クルマシテ

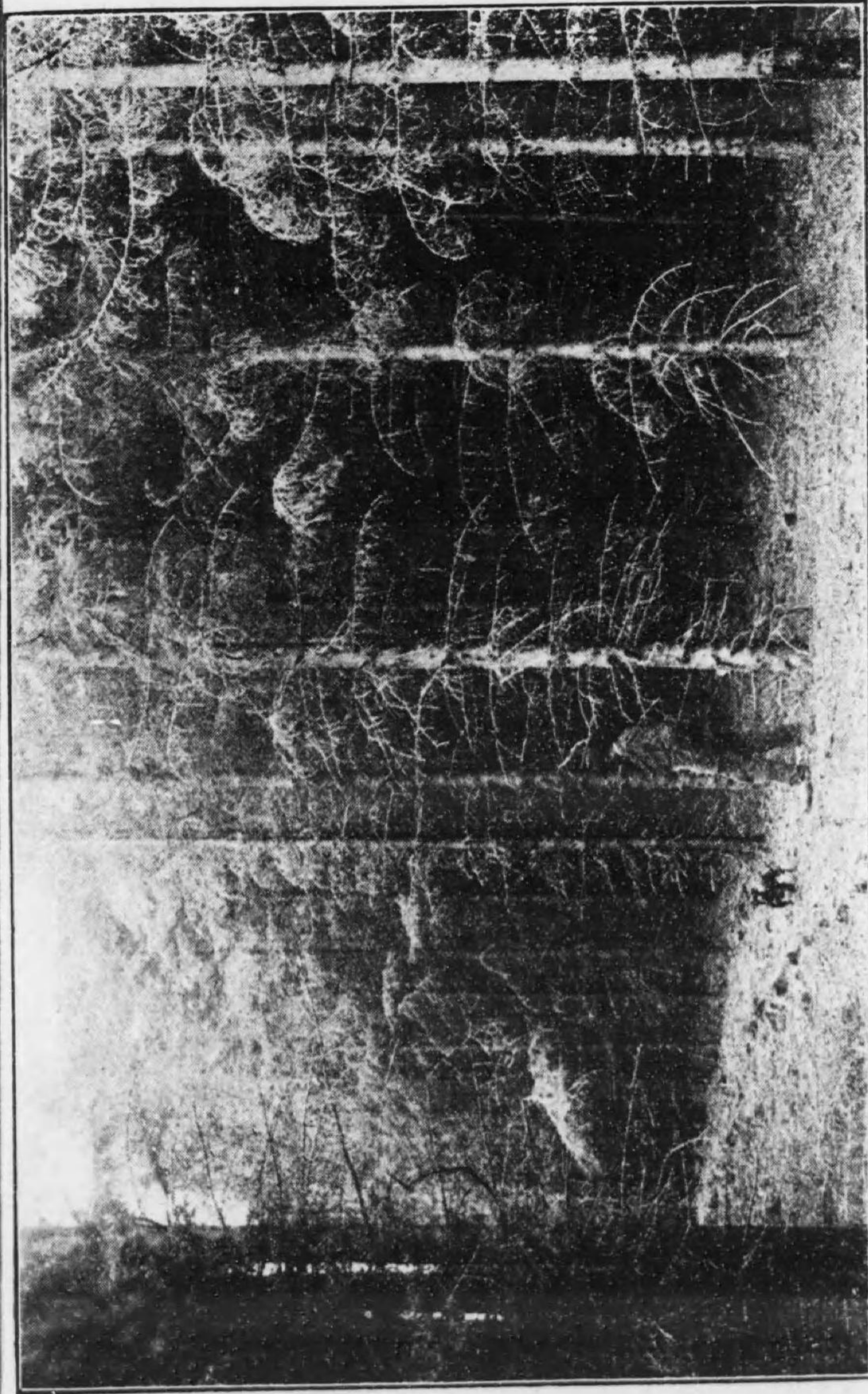
# デンマルク國の話

## 信仰と樹木とを以て國を救ひし話

明治四十四年(一九一一年)十月廿二日  
東京柏木今井館に於て述ぶ

内村鑑三

曠野と濕潤なき地とは樂しみ、  
砂漠は歡びて番紅の如くに咲かん、  
盛に咲き歡ばん。



植林成功してて大樅の密林を見る

2. 2. 25

喜び且の歌はん、

レバノンの榮えは之に與へられん、

カルメルとシヤロンの美しきとは之に授けられん、

彼等はエホバの榮を見ん、

我等の神の美はしきを視ん。

(以賽亞書三十五章一、二節)

デンマルクは歐洲北部の一小邦であります、其面積は朝鮮と臺灣とを除いた日本帝國の十分の一であります、我が北海道の半分に當り、九州の一島に當らない國で

あります、其人口は二百五十萬であります、日本の十分の一であります、實に取るに足りないやうな小國であります、然し此國に就て多くの面白い話があります。

今單に經濟上より觀察を下しまして、此小國の決して悔るべからざる國である事が判明ります、此國の面積と人口とは到底も我が日本國に及びませんが、然し富の程度に至りましては遙かに日本以上であります、其一例を舉ますれば日本國の二十分の一の人口を有するデンマルク國は日本國の二分の一の外國貿易を有つのであります、即ちデンマルク一人一人の外國貿易の高は日本人一

人の十倍に當るのであります、以て其富の程度が判明ります、或人の曰ひまするに、デンマルク人は多分世界の中で最も富んだる民であるだらふとの事でありませす、即ちデンマルク人一人の有する富は獨逸人又は英國人又は米國人一人の有する富よりも多いのであります、實に驚くべきではありません乎。

然らばデンマルク人は如何して此富を得た乎と問ひまするに、其れは彼等が國外に多くの領地を有て居るかからではありません、彼等は勿論廣きグリーンランドを有ちます、然し北氷洋の氷の中に在る此領土の經濟上殆ん

ど何の價值もない事は何人も知つて居ります、彼等は又其面積に於てはデンマルク本土に二倍する氷島國を有ちます、然し其名を聞て其國の富饒の土地でない事は直ぐに判明ります、外に僅かに鳥毛を産するフハロ島があります、又稍々富饒なる西印度中のサングロア、サントーマス、サンユリアンの三島があります、是れ確かに富の源であります、然し經濟上收支相償ふこと尠きが故に、曾ては之を米國に賣却せんと計畫もあつた位ひであります、故にデンマルクの富源と云ひまして、別に本國以外に在るのではありません、人口一人に對し世界第一の



富を彼等に供せし其富源は我九州大のデンマルク本國に於てあるのであります。

然るに此デンマルク本國が決して富饒の地と稱すべきてはないのであります、國に一鑛山あるてなく、大港灣の萬國の船舶を惹くに足る者があるのではありません、デンマルクの富は主として其土地に在るのであります、其牧場と、其家畜と、其樅と白樺の森林と、其沿海の漁業とに於て在るのであります、殊に其誇りとする所は其乳産であります、其乳油と牛酪とであります、デンマルクは實に牛乳を以て立つ國であること云ふ事が出来ず、トローヴ

ルドセンを出して世界の彫刻術に一新紀元を劃し、アンデルセンを出して近世の伽話の元祖たらしめ、キールケゴードを出して無教會主義の基督教を世界に唱へしめし、デンマルクは實に柔和なる牝牛の産を以て立つ小にして静かなる國であります。

然るに今を去る五十年前のデンマルクは最も憐れなる國でありました、千八百六十四年に獨逸の二強國の壓迫する所となり、其要求を拒みし結果、終に開戦の不幸を見、デンマルク人は善く戦いましたが、然し弱は以て終に強に勝つ能はず、デッペルの一戦に北軍敗れて再び起つ

能はざるに至りました、デンマルクは和を乞ひました、而して敗北の賠償として獨塊の二國に南部最良の二州スレスウイグとホルスタインを割譲しました、戦争は茲に終を告げました、然しデンマルクは是れがために窮困の極に達しました、元より多くも無い領土、而かも其最良の部分を持去られたのであります、如何にして國運を恢復せん乎、如何にして敗戦の大損害を償はん乎、是れ此時に方りデンマルクの愛國者が其の腦漿を絞つて考へし問題でありました、國は小さく、民は尠く、而して残りし土地に荒漠多しと云ふ状態でありました、國民の精力は斯か

る時に試めざるゝのであります、戦は敗れ、國は削られ、國民の意氣銷沈し何事にも手の着かざる時に、斯かる時に國民の眞の價値は判明するのであります、戦勝國の戦後の經營は何んな詰らない政治家にも出來ます、國威宣揚に伴ふ事業の發展は何んな詰らない實業家にも出來ます、難いのは戦敗國の戦後の經營であります、國運衰退の時に於ける事業の發展であります、戦に敗れて精神に敗れない民が眞に偉大なる民であります、宗教と云ひ信仰と云ひ、國運隆盛の時には何の必要も無い者であります、然しながら國に幽暗の臨みし時に精神の光が必要にな

るのであります、國の興ると亡ぶるとは此時に定まるのであります、何んな國にも時には暗黒が臨みます、其時之に打勝つことの出来る民が、其民が永久に榮ゆるのであります、恰かも疾病の襲ふ所となりて人の健康が判明ると同然てあります、平常の時には弱い人も強い人と違ひません、疾病に罹つて弱い人は斃れて強い人は存るのであります、其如く眞に強い國は國難に遭遇して亡びないのであります、其兵は敗れ、其財は盡きて其時尙ほ起るの精力を蓄ふる者であります、此は誠に國民の試練の時であります、此時に亡びないて彼等は運命の如何に關はら

ず永久に亡びないのであります。

越王勾踐吳を破りて歸るてはありませぬ、デンマルク人は戦に敗れて家に還つて來ました、還り來れば國は荒れ、財は盡き、見る物として悲憤慷慨の種ならざるはなしであります、今やデンマルクに取り悪しき日なりと彼等は相互に對して曰ひました、此挨拶に對して「否な」と答へ得る者は彼等の中に一人もありませんでした、然るに茲に彼等の中に一人の工兵士官がりました、彼の名をダルガス (Enrico Mylius Dalgas) と稱ひました、フランス種のデンマルク人でありました、彼の祖先は有名なるフリゲ

ノット黨の一人でありまして、彼等は一千六百八十五年信仰自由の故を以て故國フランスを逐はれ、或ひは英國に、或ひは和蘭に、或ひは普露西に、又或ひはデンマルクに逃れ來りし者でありました、フーゲノット黨の人は到る所に自由と熱信と勤勉とを運びました、英國に於てはエリザベス女王の下に其今や世界に冠たる製造業を起しました、其他、和蘭に於て、獨逸に於て、多くの有利的事業は彼等に由て起されました、舊き宗教を維持せんとするの結果、佛蘭西國が失ひし多くの物の中に、彼國に取り最大の損失と稱すべき者はフーゲノット黨の外國脱出でありまし

た、而して十九世紀の末に當て彼等は猶ほ其祖先の精神を失はなかつたのであります、ダルガス、齡は今三十六歳、工兵士官として戦争に臨み、橋を架し、道路を築き、溝を掘るの際、彼は細かに彼の故國の地味地質を研究しました、而して戦争未だ終らざるに彼は既に彼の胸中に故國恢復の策を立てました、即ちデンマルク國の歐洲大陸に連なる部分にして、其領土の大部分を占むるユットランド(Jutland)の荒漠を化して之を沃饒の地となさんとの大計畫を、彼は既に彼の胸中に立てました、故に戰敗れて彼の同僚が絶望に壓せられて其故國に歸り來りし時に、ダル

ガス一人は其面に微笑を湛え其首に希望の春を戴きま  
した、今やデスマルクに取り悪しき日なり」と彼の同僚は  
言ひました、誠に然りとガスは答へました、然しながら  
ら我等は外に失ひし所の者を内に於て取返すことが出  
来る、君等と余との生存中に我等はユトランドの曠野  
を化して薔薇花咲く所となすことが出来る」と彼は續い  
て答へました、此工兵士官に預言者イザヤの精神があり  
ました、彼の血管に流るゝフーゲノット黨の血は此時に方  
て彼をして平和の天使たらしめました、他人の失望する  
時に彼は失望しませんでした、彼は彼の國人が劍を以て

失つた物を劍を以て取返さんといましました、今や敵國に對  
して復讐戦を計畫するに非ず、劍と鍬とを以て残る領土  
の荒漠と闘ひ、之を田園と化して敵に奪はれし物を補は  
んとしました、誠にクリスチャンらしき計畫ではありま  
せん乎、真正の平和主義者は斯かる計畫に出でなければ  
なりません。

然しダルガスは單に預言者ではありませんでした、彼  
は單に夢想家ではありませんでした、工兵士官なる彼は  
土木學者でありしと同時に又地質學者であり植物學者  
でありました、彼は斯くの如くにして詩人でありしと同

時に又實際家でありました、彼は理想を實現するの術を知つて居りました、斯かる軍人を我々は時々歐米の軍人の中に見るのであります、軍人と云へば人を殺すの術にのみ長じて居る者であるとの思想は外國に於ては一般に行はれて居らないのであります。

ユトランドはデンマルクの半分以上であります、而して其三分の一以上が不毛の地であつたのであります、面積一萬五千平方哩のデンマルクに取りましては三千平方哩の曠野は過大の廢物であります、之を化して良田沃野となして、外に失ひし所の者を内に在りて償はんとする

のが、其れがダルガスの夢であつたのであります、而して此夢を實現するに方てダルガスの執るべき武器は唯二つてあります、其第一は水でありました、其第二は樹てあります、荒地に水を漑ぐを得、之に樹を植えて、殖林の實を擧ぐるを得ば、それで事は成るのであります、事は至て簡單でありました、然し簡單ではあるが容易ではありません、世に御し難い物とて人間の作つた砂漠の如きはあります、若しユトランドの荒地がサハラあれちの砂漠の如き者でありましたならば、問題は遙かに容易であつたのであります、天然の砂漠は水をさへ之に灑ぐを得

ば其れて直に沃土と成るのであります、然し人間の無謀と怠慢とに成りし砂漠は、之は恢復するに最も難い者であります、而してユトランドの荒地は此種の荒地であつたのであります、今より八百年前の昔には其處に繁茂せる良き林がありました、而して降て今より二百年前までは處々に柵の林を見ることが出来ました、然るに文明の進むと同時に人の慾心は益々増進し、彼等は土地より取るに急にして之に酬ゆるに緩てありました故に、地は時を追ふて益々瘠せ衰へ、終に五十年前の憐れむべき状態に立到つたのであります、然し人間の強慾を以てするも

地は永久に殺すことの出来る者ではありません、神と天然とが示す或る適當の方法を以てしますれば、此最悪の状態に於てある土地をも元始の沃饒に返すことが出来ます、誠に詩人シルレルの言ひしが如く、天然には永久の希望あり、壊敗は之をたゞ人の間に於てのみ見るのであります。

先づ溝を穿て水を注ぎ、ヒーズと稱する荒野の植物を驅逐し、之に代ふるに馬鈴薯或ひは牧草を以てするのであります、此事は左程の困難ではありませんでした、然し難中の難事は、荒地に樹を植ゆることでありました、此事

に就てダルガスは非常の苦心を以て研究しました、植物界廣しと雖もユトランドの荒地に適し其處に成育してレバノンの榮を呈はす樹は有るや無しやと彼は研究に研究を重ねました、而して彼の心に思ひ當りましたのは那威産の樅でありました、是れはユトランドの荒地に成育すべき樹であることは分りました、然しながら實際之を試験して見ますると、思ふ通りには行きません、樅は生えまするが數年ならずして枯れて了ひました、ユトランドの荒地は今や此強硬なる樹木をさへ養ふに足るの養分を存しませんてした。

然しダルガスの熱心は之れがために挫けませんでした、彼れは天然は亦彼に此難問題をも解決して呉れる事と確信しました、故に彼は更らに研究を續けました、而して彼の頭腦にフト浮び出ましたことはアルプス産の小樅でありました、若し之を移植したならば如何と彼は思ひました、而して之を取り來りて那威産の樅の間に植えました、時に、不思議なる哉、兩種の樅は相併んで生長し、年を経るも枯れなかつたのであります、茲に於て大問題は釋けました、ユトランドの荒野に、始めて緑の野を見ることが出来ました、緑は希望の色であります、ダルガスの希



望、デンマルクの希望、其民二百五十萬の希望は實際に現はれました。

然し問題は未だ全く釋けませんでした。緑の野は出來ましたが、緑の林は出來ませんでした。エツトランドの荒地より建築用の木材をも伐り得んとのダルガスの野心的慾望は事實となりて現はれませんでした。樅は或る程度まで成長して、其れて成長を止めました。其の枯死はアルプス産の小樅の併植を以て防ぎ得ましたけれども、其永久の成長は之に由て成就られませんでした。ダルガスよ、汝の預言せし材木を興へよ」と言ひてデンマルクの農夫

等は彼に迫りました。恰かもエジプトより遁出しイスラエルの民が一部の失敗の故を以てモーセを責めたと同然でありました。然し神はモーセの祈願を聽き給ひしが如くにダルガスの心の叫をも聽き給ひました。默示は今度は彼に臨まずして彼の子に臨みました。彼の長男をフレデリック・ダルガスと稱ひました。彼は父の質を受けて善き植物學者でありました。彼は樅の成長に就て大なる發見を爲しました。

若かきダルガスは言ひました。大樅が或る程度以上に成長しないのは小樅を何時までも大樅の側に生して置

くからである、若し或る時期に達して小樅を斫拂つて仕舞ふならば大樅は獨り土地を占領して其成長を續けるてあらふと、而して若かきダルガスの此言を實際に試して見ました所が實に其通りでありました、小樅は或る程度まで大樅の成長を促がすの能力を持つて居ります、然し其程度に達すれて却て之を妨ぐる者であるとの奇態なる植物學上の事實がダルガス父子に由て發見せられたのであります、而かも此發見はデンマルク國の開發に取りては實に絶大なる發見でありました、之に由てユットランドの荒地挽回の難問題は解釋されたのであります、

是れよりして各地に鬱蒼たる樅の林を見るに至りました、千八百六十年に於てはユットランドの山林は備かに十五萬七千エーカルに過ぎませんでした、四十七年後の千九百〇七年に至りましては四十七萬六千エーカルの多きに達しました、然し是れ尙ほ全州面積の七分二厘に過ぎません、更らにダルガスの方法に循ひ殖林を繼續致しまするならば數十年の後には彼地に數百萬エーカルの綠林を見るに至るのであります、實に多望と謂つべしてあります。

然し殖林の効果は單に木材の收穫に止まりません、第

一に其善き感化を蒙りたる者はユットランドの氣候でありました、樹木の無き土地は熱し易くして冷め易くありません、故にダルガスの殖林以前に於てはユットランドの夏は晝は非常に暑くして、夜は時に霜を見ました、四六時中に熱帯の暑氣と初冬の霜を見ることとてありますれば、植生は堪つた者ではありません、其時に方てユットランドの農夫が收穫成功の希望を以て植ゆるを得し植物は馬鈴薯、黒麥、其他少數の者に過ぎませんでした、然し殖林成功後の彼地の農業は一變しました、夏期の降霜は全く止みませんでした、今や小麥なり砂糖大根なり北歐産の穀類又は野菜

にして、成熟せざる者なきに至りました、ユットランドは大縦の林の繁茂の故を以て良き田園と化しました、木材を興へられし上に善き氣候を興へられました、植ゆべきは誠に樹であります。

然し殖林の善き感化は之に止まりませんでした、樹木の繁茂は海岸より吹送る所の砂塵の荒廢を止めました、北海沿岸特有の砂丘は海岸近くに喰止められました、縦は根を地に張りて襲ひ來る砂塵に對して言ひました、

此までは來るを得べし

然し此を越ゆべからず

と約百記三十八章十一節、北海に瀕する國に取りては敵國の艦隊よりも恐るべき砂丘は戦闘艦ならずして緑の縦の林を以て茲に美事に撃退されたのであります。霜は消え、砂は去り、其上に第三に洪水の害が除かれたのであります、是れ何處の國に於ても殖林の結果として直に現はるゝ者であります、勿論海拔六百尺を以て最高點となすユトランドに於ては我邦の如き山國に於けるが如く洪水の害を見ることはありません、然し比較的少き此害をすらダルガスの事業に由て免がるゝを得たのであります。

斯の如くにしてユトランドの全州は一變しました、廢れし市邑は再び起りました、新たに町村は設けられました、地價は非常に騰貴しました、或る所に於ては四十年前の百五十倍に達しました、道路と鐵道とは縦横に築かれました、我四國全島に更らに一平方哩を加へたるユトランドは復活しました、戦争に由て失ひしスレスウグとホルスタインとは今日已に償はれて尙ほ餘りあるとの事であります。

然し木材よりも、野菜よりも、穀類よりも、畜類よりも更らに貴き者は國民の精神であります、デンマルク人の精

神はダルガスの殖林成功の結果として茲に一變したの  
てあります、失望せる彼等は茲に希望を恢復しました、彼  
等は國を削られて更らに新たに良き國を得たのであり  
ます、而かも他人の國を奪つたのではありません、己れの  
國を改造したのであります、自由宗教より來る熱誠と忍  
耐と、之に加ふるに大樞小樞の不思議なる能力とに由り  
て彼等の荒れたる國を回復したのであります。

ダルガスの他の事業に就て私は今此所に語るの時を  
有らません、彼は如何にして砂地を田園に化せし乎、如何  
にして沼地の水を排ひし乎、如何にして礮地を拓いて果

樹園を作りし乎、是等は皆な彼れの殖林事業に劣らぬ面  
白き物語であります、他日機會を得てお話しいたしたく  
欲ひます。

今、此所にお話し致しましたデンマルクの話は私供に  
何を教へます乎。

第一に戰敗必しも不幸にあらざる事を教へます、國は  
戦争に負けても亡びません、實に戦争に勝て亡びた國は  
歴史上決して尠くないのであります、國の興亡は戦争の  
勝敗に因りません、其民の平素の修養に因ります、善き宗

教、善き道德、善き精神ありて國は戦争に負けても衰へま  
せん、否な、其正反對が事實であります、牢固たる精神あり  
て戰敗は却て善き刺激となりて不幸の民を興します、デ  
ンマルクは實に其善き實例であります。  
第二に天然の無限的生産力を示します、富は大陸にもあ  
ります、島嶼にもあります、沃野にもあります、砂漠にもあ  
ります、大陸の主必しも富者ではありません、小島の所有  
者必しも貧者ではありません、善く之を開發すれば小島  
も能く大陸に勝るの産を産するのであります、故に國の  
小なるは決して歎くに足りません、之に對して國の大なる

も決して誇るに足りません、富は有利化されたるエネルギー  
（力）であります、而してエネルギーは太陽の光線にも在  
ります、海の波濤にもあります、吹く風にもあります、噴火  
する火山にもあります、若し之を利用するを得ますれば  
是等は皆な悉く富源であります、必しも英國の如く世界  
の陸面六分の一の持主となるの必要はありません、デン  
マルクで足りります、然り其れよりも小なる國で足りります、  
外に擴がらんとするよりは内を開發すべきであります。  
第三に信仰の實力を示します、國の實力は軍隊ではあ  
りません、軍艦ではありません、將又金ではありません、銀

てはありませぬ、信仰て、ありませぬ、此事に關しましては、マハン大佐も未だ眞理を語りませぬ、アダム・スミス、J・S・ミルも未だ眞理を語りませぬ、此事に關して眞理を語つた者は矢張り舊い聖書であります、

若し芥種からしだねの如き信仰あらば此山に移りて此處より彼處に移れと命ふとも必ず移らん、又汝等に能はざることを無るべし

とイエスは曰ひ給ひました(馬太傳十七章二十節)又凡そ神に由て生るゝ者は世に勝つ、我等をして世に勝たしむる者は我等の信なり

と聖ヨハネは曰ひました(約翰第一書五章四節)世に勝つるの力、地を征服するの力は矢張り信仰であります、ノット黨の信仰は彼等の中の一人を以て鋤と樅樹とを以てデンマルク國を救ひました、縦し又ダルガス一人に信仰がありましてもデンマルク人全體に信仰がありませんとしたならば、彼の事業も無効に終つたのであります、此人あり、此民あり、佛國より輸入されたる自由信仰あり、デンマルク國自生の自由信仰ありて此偉業が成つたのであります、宗教や信仰は經濟に關係なしと唱ふる者は誰であります乎、宗教は詩人と愚人とに佳くして實際家

と智者に要なしなど、唱ふる人は歴史も哲學も經濟も何にも知らない人であります、國に若し斯かる愚かなる智者のみありて、タルガスの如き「**智き愚人**」が居りませんならば、不幸一步を誤りて**戰敗の非運**に遭ひまするならば、其國は其時倏ちにして亡びて了ふのであります、國家の大危険にして**信仰を嘲けり**之を無用視するが如き事はありませぬ、私が今日茲にお話し致しました**ドンマル**とタルガスとに關する事柄は大に輕佻浮薄の我國今日の經世家を警むべきであります。

大正二年二月十八日印刷  
大正二年二月廿一日發行

實價一冊に付き金五錢  
百冊以上一冊に付き金三錢五厘の割。

編輯人 内村鑑三

發行兼印刷人 内村シヅ

發行所 聖書研究社

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場





内村鑑三主筆

# 聖書之研究

純粹なる宗教雜誌なり、現世に就て語らず、來世に就て語る、肉體に就て語らず、靈魂に就て語る、直ちに天よりの默示に接して艱める人世を慰めんと欲す、創刊以來十三年に達す、誠實なる讀者を海内内外に有す、毎月一回十日發行、一冊に付き金拾貳錢、一年分(十二冊)金壹圓貳拾錢、郵税を要せず、べて前金の事。

發行所

東京府下湊橋  
町柏木九一九

聖書研究社

# 終